

# 「日ロ まず信頼醸成を」

## 学識者 極東専門家と討論

ロシア極東ウラジオストクと日本の専門家が両国関係の現状と協力のあり方を探る国際シンポジウム「日露対話 複雑化する北東アジア情勢と日露協力の可能性」（グローバル・フォーラム主催、日本国際フォーラムなど共催）が先月上旬、東京都内で開かれた。国際情勢など多岐にわたるテーマで計五時間以上に及んだ討論の中から、日ロ関係に絞って紹介する。

（常盤伸、写真も）

日ロ協力を巡ってロシア側は、各分野での実務協力の進展を強調。バクラーノフ太平洋地理学研究所長は、極東の発展には日本などの協力が大事だとし、税制など多くの優遇措置を講じる十八の先行経済圏を呼ぶ掛けるとともに、温暖化で注目される北極圏の航路開発と資源開発での協力をより「地域の平和と安定を構築できる」と主張。またセルギエンコ科学アカデミー副総裁は「自然災害のモニタリングや日本海環境保護、北極圏の永久凍土モニタリングなど学術協力の可能性は有望だ」と述べた。

一方、北方領土問題では、経済交流を活発化して交渉促進を目指す「新しいアプローチ」は進展していない。袴田茂樹新潟県立大

## ロシア側 領土交渉 慎重に発言

教授は、日本企業が対口進出に消極的な背景について「経済特区が中国や東南アジアのような本格的な経済特区になっていないことが大きい」と投資環境の課題を指摘。廣瀬陽子慶応大教授は「政治的対話とさまざまな領域での協力関係を進めることで両国の信頼醸成を図るべきだ」と述べた。

一九五六年の日ソ共同宣言を基礎にした新たな枠組みでの領土交渉について、極東ではどう受け止めているか。日本側の質問に、ロシア側は「作業は継続され、活発化しているが、具体的な内容は誰も分からない。ロシア政府の関係者でも分からないかもしれない」（ゴルチャコフ元沿海地方議会議長）などと慎重な発言に終始した。ラリー

GLOBAL VIEWS



都内で先月行われたシンポジウムで、あいさつするセルギエンコ・ロシア科学アカデミー副総裁（左から5人目）

ン科学アカデミー極東支部副会長は「われわれは袋小路に陥り（そのままでは）新しいアイデアは生まれないのでは。世界の安全保障や中国（の台頭）など、新たな問題への対応で両国が何ができるかという観点が大事だ」と述べ、北方領土をめぐる日ロの認識の深い溝をあらためて印象づけた。

このほか、日本の複数の軍事専門家から、米国の中距離核戦力（INF）廃棄条約破棄が領土問題にも影響を及ぼすとの見方が示された。兵頭慎治・防衛研究所地域研究部長は「ロシアは中国の核（戦力）の伸長に一番敏感だ。極東にロシアの中距離核が出現した場合、平和条約の問題とどう絡め議論するかも今後の課題だ」と指摘した。